

はじめに

栗原敦

梶井基次郎生前唯一の短篇小説集『檸檬』は、昭和六年五月に武蔵野書院より刊行された。表題作「檸檬」(『青空』創刊号、大正14・1刊に発表)は、世に梶井を代表する作品として知られるのみならず、近代短篇小説の名作としての評価をも与えられている。本書は、この「檸檬」を生み出す母胎となった草稿群の本文がどのように生成したか、その全過程を説明しようと試みた探究の成果である。

いま、「檸檬」を含む草稿群と呼ぶことにするこの草稿は、梶井の没後に残された遺稿のひとつである。旧友淀野隆三の手によって、梶井が亡くなって一年以上後の『文芸』(昭和8・12)に「仮りに「瀬山の話」と名付けられ公表され、一般に知られることになった。その後刊行された数度の『梶井基次郎全集』にも収録されたが、いずれも草稿の実情や、本文校訂の過程、本文決定の根拠などが示されることはなかった。それは、個々の全集編纂に際しても、近代文学における本文校訂、本文研究に対する意識がまだ十分に高まっていなかったためかとも思われるが、いずれにせよ、本文校訂とその結果の妥当性などを検証するすべも得られなまま、淀野の死後、草稿自体の行方も分からなくなっていたのである。

幸いにして、縁あって平成二十三年にこの草稿が実践女子大学に収蔵されることとなった。ここに出現した「檸檬」を含む草稿群」を前にして、迫り来る表現者としての梶井基次郎の営みの様々、いわば表現者の沈思し、乱れ、制御し、破裂し、また集約するといった、激しくもまた粘り強い作品生成の現場、苛烈にして、危機的ともいえない作家の（あるいは作家誕生の）生動する姿に打たれない者はいないのではないだろうか。

「檸檬」を含む草稿群」の本文研究と翻刻の詳細は、本書の棚田輝嘉、河野龍也による研究の成果によっていただき、ここでは、以下に作品の生成と表現行為をめぐって、新たな「作品」観の提示を試みる私見を添えておきたい。実際、「檸檬」は、本「檸檬」を含む草稿群」の中核部分に〈原形〉がある。いや、その言い方では十分でないかもしれない。他にも残されている「秘やかな楽しみ」なる詩作品草稿の存在なども視野に入れなければならない。早い時期からあった「一顆の檸檬」に纏わる原イメージを小説的に熟成させつつ、「檸檬」を含む草稿群」の全体として何段階かに涉って構築しようとして試みながら、ついに果たし得ぬままに中断し、改めて、「檸檬」の〈原形〉的部分と見なしうるようになることから独立させ、短篇作品として磨き上げた、とでもいべきかもしれない。

主人公「私」は名前を持たない。〈原形〉的部分も「檸檬」もそれは同様である。しかし、誰でもすぐわかるように、草稿群全体の中では、焦点人物を「その男」・「瀬山」と呼び、語り手「私」と距離をとって対象化させようとしてみている。その上で、〈原形〉的部分では、「その男」の物語に包み込まれた、その内部でのエピソードの表出という形（入れ子型）が試みられていると見なされる。人物設定上の素材として、作者梶井の周辺に「その男（瀬山）」のモデルと見なせる人物があったのか、それとも単に作者自身のある側面を対象化させようとして生み出された人物なのかといった議論は梶井基次郎研究にゆだねることとして、焦点人物への向かい方の差は、「檸檬」とこの「檸檬」を含む草稿群」との間に創作の方向において大きな違いがあることを示している。草稿群の側が、「その男（瀬山）」

の現実的境遇や関係の実情の絡みに向かう傾きを強く持って、「私」の対象化とその意識の問題、自己と分身の主題など、大きく自意識を巡る主題としての同時代的課題に近接しているとも見えるのに対して、「檸檬」はすでに形成された「私」の精神状態の実在性の上に立った、ある意味では内的な精神のドラマの次元に運び込まれた物語へと磨き上げられているのである。

「檸檬」の側のこうした特質は、物語の構造を精神のドラマとして徹底し、純化し、その内部での解放を美的に（美学的に）結晶させた。「蝕まれ」た生活の実態や原因への指向、泥酔や放蕩と改悛の心理などへの密着、生活の破綻と母への罪悪感など、堂々巡りする葛藤の実際は水面下に潜められ、「えたいの知れない不吉な塊」を抱えた心の次元を全ての出発となし得る世界を確立させた。そのような世界の自立性を根拠として、「私」の心的な趣味の傾きを描き、「現実の私自身を見失う」「楽しみ」を可能とする心的領域を用意し、この舞台の中を微妙な心理の動きで満たし、その上で更に違和をもたらず空間とその造作に出合わせ、あくまで想像的な自由の構想、すなわち現実の爆弾ではない、想像の爆弾によってそれらを「大爆発」させる。

いわば、抑鬱のもたらす精神的な固有の状態の確認と、想像力による爆破としてのその否定、そして自由な想像がもたらしたゆえに獲得された精神的な解放の新次元が提示されたということなのであって、まさしく弁証法的ともいべき展開が表現されたのである。「檸檬」の美的（美学的）な結晶度の高さととは、この構造に支えられている。

作品集『檸檬』によって作品が提示されたとき、同時代の読者は、そのまま「私」の精神のドラマとして、この美的（美学的）結晶度の高さに反応した。後に、国語科授業の教材として用いられるようになったのは、様々な現実の、個別的な影を一旦無きものにして、精神的な共通の出発点となし得る青春の心境を地表とした舞台構成、それでいて、感受性の微妙なりアリティが十分に裏付けをなしている表現が、教室にとっても好適なものだったためではなからう

か。

ひるがえって、「檸檬」を含む草稿群はどうか。美的（美学的）結晶度によってはかるには、とうてい馴染まない。様々な夾雑物が混在し、構造も未整理というほかはない。従来の全集が「習作」と分類したことは頷けないわけではない。しかし、ここには、「檸檬」では切り離され、取り上げるわけにはいかなかった可能性が残されていると認めることができる。作家梶井基次郎の、昭和初年の晩年にまで続く歩みの芽生えもまたこの中に潜められている。

文学（作品）とは、通常、完成原稿として発表されたものを前提に思い描かれる。しかし、それは言語の本質、伝達の原理からいっても、実は表現としてそれを生み出した全ての過程によって形成されたものであって、背後に隠された全てを含んで読む者に働きかける生きた現象なのである。表現過程の全てによって（作品）は現象する。表現者の側に立った整理をすれば、この（作品）観は、表現者の「表現行為としての（作品）」とでもいうことができるが、私たちのもとにもたらされた「檸檬」を含む草稿群は、その最も刺激的なひとつに他ならない。「表現過程それ自体」を（作品）と捉える（作品）観を添えて、ここに本書をお届けするゆえんである。

この度、初版本『檸檬』を刊行された歴史ある武蔵野書院の創立百年にあたって、「檸檬」を含む草稿群」本文の影印、翻刻、本文研究である本書を刊行させていただく機会を与えられたことは、執筆者一同喜びに堪えない。心より感謝申し上げる次第である。

目次

はじめに	栗原 敦	i
影印篇（縮小率70%）		1
檸檬 武蔵野書院版 影印		163
翻刻篇	河野 龍也	177
記号凡例		183
「檸檬」を含む草稿群について	棚田 輝嘉	285
「檸檬」の忘れ物——その秘められた起爆力	河野 龍也	297
参考資料		333

は	な	な	恐				せ	こ	私	て
も	塊	い	ろ				や	に	は	お
う	か	嫌	し				ろ	し	今	た
の	一	厭	レ				と	て	そ	こ
ん	重	と	ソ				男	見	の	は
な	く	ハ	コ				ふ	で	挿	は
美	る	は	ト					彼	誌	由
し	る	う	ハ					の	を	意
ソ	し	か	ハ					語	詠	は
音	く	焦	私					リ	み	な
泉	私	燥	の					振	に	ソ
も	を	と	心					リ	一	の
	厭	ハ	の					の	人	女
美	し	ハ	中					か	称	
シ	て	は	の					を	の	
ソ	み	う	得					行	ナ	
詩	て	か	休					御	レ	
の		不	の					す	イ	
一	私	吉	知						コ	
節	に		小							

櫻
梅

私は今その挿話を試みに一人称のナレイションにして見て彼の語り振りの幾分かを彷彿させやうと思ふ。

× × × × ×³⁵

椽^椽 椽^椽₃₆

恐ろしいことには私の心の中の得体の知れない嫌厭といはうか、焦燥といはうか、不吉な塊が——重くるしく私を壓してゐて、私にはもうどんな美しい音楽も 美しい詩の一節も辛抱出来ないのが其頃の有様だった。

全く辛抱出来なかったのだ。——蓄音器をきかせて貰ひにわざく出かけても——最初の二三小節で不意に立ち上ってしまひ度くなる【のだ。】へそれでゐて新聞の三面など読んでゐても下らない記事に直ぐ感動したりして鼻を膨ますことが実に屢々あった。³⁷

それで四常³⁸私は街【を】から街へ彷徨を続けてゐたのだ。何故だか其頃³⁹私は見すばらしくて美しいもの《《を》》に強くひきつけられたのを覚えてゐる。

35 上部欄外に「二行」、上三つの「×」を右行間に「*」と訂正、下二つの「×」に削除指示（鉛筆痕）。

36 「椽」の前に「椽」（鉛筆痕）。

37 淀野註「梶井の消し」

38 「始」（鉛筆痕）。

39 「その」（鉛筆痕）。